第5次
地域福祉活動計画の
振り返り

第3章

1 計画が目指したもの

令和2年度(2020年度)～令和6年度(2024年度)の第5次地域福祉活動計画を策定するにあたっては、その前期の第4次計画の取り組みを振り返り、「ネリーズ」「キーパーソン」「地域福祉コーディネーター」の取り組みを更に推進することで、以下の3つを強化していくことを目指しました。

Point

第5次地域福祉活動計画で強化を目指した3つのポイント

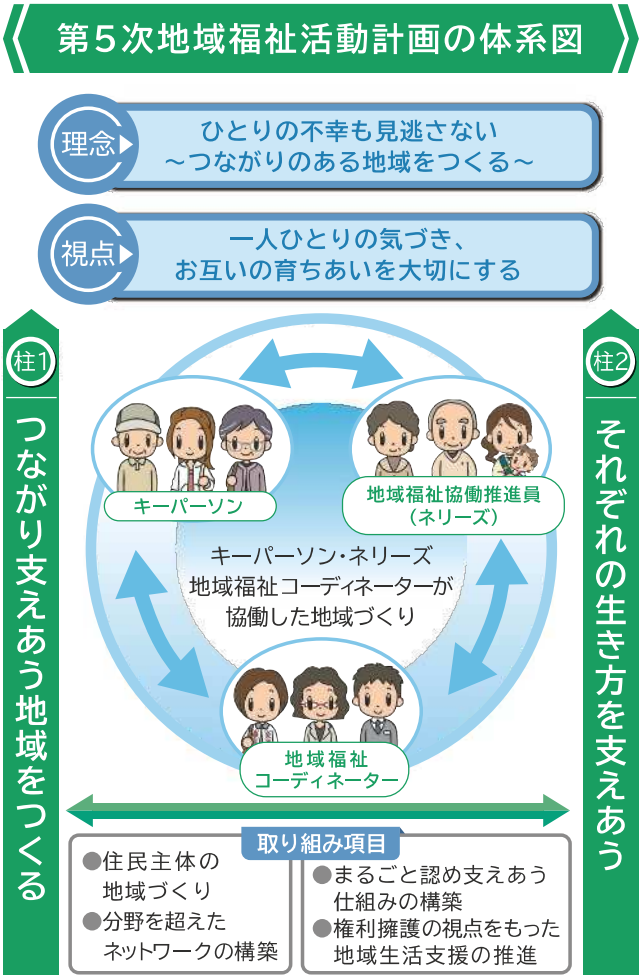
(1) 地域の「気づき」を共有するだけでなく、それを広く発信していく。
(2) 地域福祉コーディネーターは、「生きづらさ」を地域の課題としてとらえるため、地域で身近に自発的な活動を行っている「キーパーソン」とのつながりを強化していく。
(3) 第4次計画で芽吹いた「ネリーズ」や「社会福祉法人等のネット」を生かし、地域住民から専門機関までが練馬らしい地域づくりを進めていく。

2 成果と課題

第5次計画では、2つの柱(「つながり支えあう地域をつくる」と「それぞれの生き方を支えあう」)を設定しました。特に柱2は個の尊厳の視点を強化した柱です。こうした柱を設定してスタートした計画ですが、計画の初年度からコロナ禍に見舞われ、地域では人と接する機会が減り、地域活動も停滞しました。その一方で、誰もが当事者となったコロナ禍は、誰もが「支えあう」ことの大切さに気づかされ、地域共生社会はどんな状況でも揺るがないことが再認識されました。また、特例貸付をはじめ社協に寄せられる相談が増加したことから、これまでは十分に見えなかった地域課題が見えてきたり、社協と関わりが少なかった様々な人の暮らしを知る機会になりました。

第5次計画の取り組みを通じて、以下のように、主な成果と課題がみられました。

第5次地域福祉活動計画の体系図



柱1 つながり支えあう地域をつくる

（1）住民主体の地域づくり

（取り組み内容）◆誰もが参加できる地域活動を推進する
◆ネリーズの気づきの輪を広げ発信力を高める
◆地域に暮らすキーパーソンの力を地域づくりにつなげる
◆災害に備えた地域の関係づくり

成　果	課　題
①「地域福祉実践報告会」をコロナ禍も継続し、地域団体同士のつながりを広げた。 ②コロナ禍でも社協が運営する作業所、地域生活支援センターでは利用者が地域住民と関わる活動をできる範囲で続けた。 ③ネリーズ懇談会を「多様性を認め合う」などをテーマに継続的に開催した。 ④地域に暮らし身近に自発的な活動を実践する「キーパーソン」の事例を集積し、四コマ漫画等で表現した。身近にネリーズのような気づきが共有されると新しい活動が始まっており、ネリーズとキーパーソンはその機能が重なり合うことが分かった。 ⑤災害シンポジウムや入門講座を通じて地域住民や関係団体のつながりを広げた。	①就労する高齢者も増え、若い世代も含め仕事をしていても参加しやすい活動が求められてくる。 「誰もが参加できる」地域活動の在り方に新しい工夫が必要となる。 ②多様な地域課題をさらに広く地域住民に分かりやすく発信することが必要となる。 ③ネリーズ通信を発行し続けたが、ネリーズ以外への発信やネリーズ自身による発信を強化するなど、発信力を高めていくことが期待される。

ネリーズ（地域福祉協働推進員）

733人（令和6年12月現在）
☆5次計画の目標（730名）達成☆
5年間で、懇談会を11回開催
ネリーズ通信を第33号まで発行

社会福祉法人等のネットワーク

◉大泉地区　社協拠点
◆地域福祉コーディネーター
★ネリーズ懇談会
★社会福祉法人等のネット連絡会

社協拠点　◉光が丘地区
◆地域福祉コーディネーター
★ネリーズ懇談会
★社会福祉法人等のネット連絡会

◆地域福祉コーディネーター
★ネリーズ懇談会
★社会福祉法人等のネット連絡会

◆地域福祉コーディネーター
★ネリーズ懇談会
★社会福祉法人等のネット連絡会

◉石神井地区　社協拠点

社協拠点　◉練馬地区

区内65法人100か所を超える事業所が参加
活動テーマ＝
「就労体験」「交流の場・居場所づくり」「福祉教育」

（2）分野を超えたネットワークの構築

（取り組み内容）◆ 社会福祉法人等のネットワークを活用した仕組みづくり
◆ 地域課題を共有できるネットワークづくり
◆ 地縁組織や地域のさまざまな活動の連携を深める

成　果	課　題
①社会福祉法人等のネットワークでは、「ネリーズと同じ4つのエリアごとの取組みを進めた。全体会には、各地区の民生委員が出席して法人と情報交換した。 ②生活困窮者の相談から見える課題を民生委員と共有したほか、ボランティアセンターに相談のあった「発達性読み書き障害」の事例をもとに、その課題を知ってもらうプロジェクトを展開するなど、社協の各事業で相談を重視した活動を展開した。（17・18ページ参照） ③民生委員や施設職員と連携し、コロナ禍に外出できない世帯の食料支援などに取り組んだ。	①地域課題をさらに地域住民に知ってもらう取り組みを広げていくことが必要となる。 ②地域福祉コーディネーター、社会福祉法人等のネットワーク、ネリーズが地域にある課題を共有し、連携を進めていくことが期待される。

柱2　それぞれの生き方を支えあう

（1）まるごと認め支えあう仕組みの構築

（取り組み内容）◆ 複合的な課題への対応・はざまの支援
◆ 生活・就労の一体的支援

成　果	課　題
①当事者同士が「本人の望む生活・はたらき方」を語り合い、多様な価値観があるということを当事者から学ぶ視点で確認することができた。 ②孤立や課題を早期に発見するため、各拠点における相談事例を共有したほか、第6次計画に向けて地域福祉活動団体にインタビューを実施した。 ③食料支援の展開を通じて、複合的な課題に対応する関係機関の連携を強化した。 ④外国人支援等のためのNGOや専門機関との連携など、福祉に限らない分野との連携に取り組んだ。	①本人の望む多様なはたらき方を当事者の視点で広く発信する機会を広げることで地域からの理解を深め、地域で支える参加支援に結びつけていくことが必要となる。 ②複合的な課題を早期に把握し本人主体による課題解決や地域の理解へと進めるため、ネリーズや社会福祉法人のネットワーク等の関わりを強化していく必要がある。 ③公的機関に限らない多機関協働やインフォーマルな活動とフォーマルな取り組みの連携を作り上げていくことが必要となる。

（2）権利擁護の視点をもった地域生活支援の推進

（取り組み内容）◆ 当事者の力を活かした福祉教育
◆ 福祉人材の育成
◆ その人らしい地域生活を支える

成　果	課　題
①社協の運営する福祉作業所や地域生活支援センターでは、学校や地域と連携し、当事者自身が語ることを通じて障害を理解してもらう取り組みをコロナ禍も続けた。 ②学校の授業や講座に限らず、農園などの場で利用者と地域の人が一緒に作業するような場を通じて、当事者の力を活かした福祉教育を幅広い視点で進めた。 ③障害福祉人材育成・研修センターを事業団へ移管したが、同センターで当事者の声も踏まえて作り上げた「目指すべき人物像」を社協内部での研修に引き継いだ。 ④その人らしい地域生活を送ることができるよう、成年後見制度をはじめとした権利擁護の必要性を検討する仕組みづくりや市民後見人の養成を進めてきた。	①当事者の力を活かした福祉教育を社会福祉法人等のネットワークやネリーズと連携し、幅広く学校と推進していくことが期待される。 ②権利擁護支援について話し合う検討支援会議の仕組みと重層的支援体制整備事業を活用した他機関協働の仕組みが連携し、その人らしい地域生活を支える体制を強化することが必要となる。 ③権利擁護の視点を持った取り組みをその人らしい地域生活を支える様々な事業やネットワークと共有していく必要がある。

これらの成果や課題から、「それぞれの生き方を認め支え合う」「つながり支え合う地域をつくる」ことは引き続き強化すべき重要な取り組みの柱と考えられます。なお、地域にある課題に対して地域住民が自発的に動く（=「キーパーソン」の機能）機会を増やしていくうえで、「ネリーズ」の気づきの広がりは重要になります。第6次計画では、「ネリーズ」「社会福祉法人等のネットワーク」「地域福祉コーディネーター」を計画の「推進力」とし、以下を強化していくことが求められます。

Point

第6次地域福祉活動計画に向けて

(1) その人らしい生き方を認め合い、つながりのある地域づくりとともに、
誰もが参加して活躍できる地域づくりを進めていく。
(2) 地域の課題を3つの推進力を生かして、広く地域住民に発信していく力を高める。
(3) 当事者の力を生かした権利擁護支援の視点を様々な場で展開していく。

報告 地域福祉コーディネーターの実践 ～気づき・つなぎ・広げる～

地域福祉コーディネーターには障害の有無や年齢、性別、国籍等に関係なく、さまざまな相談が寄せられます。「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」ために、地域福祉コーディネーターは、一つひとつの相談を受け止め、できることから参加の輪を広げ、支え合いの地域づくりに取り組んでいます。ここでは、地域の方の相談をきっかけに、発達障害のある方や家族、地域で支援をしている団体等による活動が共感者を呼び、そしてあるプロジェクトが生まれた実践例をご紹介します。

■ はじまりは一本の電話から

平成30年、練馬区社協にかかってきた１本の電話は、区内に住む一人のお母さんからのものでした。発達性読み書き障害がある中学生のお子さんのために、教科書のルビ振りをボランティアにお願いしたいという相談でした。地域福祉コーディネーターはボランティアの協力を得て、ルビを振ることができました。でもそれだけで、お母さんの悩みが解決したようには見えませんでした。

そこでまずは、この障害のことをもっと知るために、地域福祉コーディネーターが中心となって小さな勉強会を開催しました。勉強会の終了後の会場では、そこで出会った同じ障害のある子どもを持つ保護者の皆さんがずっと話を続けていました。

■ 出会えた仲間たち

出会った保護者の皆さんが「もっと情報交換がしたい」と言い、できたのが、『えるでぃ～学習障害について考える会』です。情報交換の場は、次第に同じ悩みを持つ保護者の皆さんが悩みを打ち明け、励まし合える大切な場へとなっていきました。ただ毎回、会の最後には「もっと多くの人がこの障害のことを知ってくれたらいいのに…」という深いため息が出ていました。

『えるでぃ』には、これまでのべ600人以上が参加しました

■ 応援団が見つかった！

そんなある日、東京練馬中央ロータリークラブ(国際的な社会奉仕連合団体）から地域福祉コーディネーターに、「練馬で困っていることはありませんか。できることがあれば一緒に取り組みたいです」と相談が入りました。そこで『えるでぃ』の皆さんの悩みを伝えたところ、「一緒にこのことを広めていきましょう」とプロジェクトを立ち上げることになりました。

What?

※発達性読み書き障害（ディスレクシア）とは

学習障害の一種で、知的発達に遅れはないものの、「読む」「書く」ことに困難が見られる障害です。
小学校では 1クラスに2～3人そうした子どもがいると報告されています。

■「地域で発達性読み書き障害の理解を深めるプロジェクト」スタート

令和2年から始まったプロジェクト企画は、コロナ禍で変更を余儀なくされながらも進み続け、令和4年から本格的に実施しました。

プロジェクトで取り組んだこと

◆『発達性読み書き障害早わかりガイド』3000部発行
区内の全小中学校、関係機関に配布

◆シンポジウム×2回 のべ1000人が参加。

◆YouTube版『発達性読み書き障害
早わかりガイド』を配信。
2万3千回再生（令和7年3月現在）

◆当事者でもある落語家を招いての
講演会に461人が参加

シンポジウム参加者の声

人生のステージごとに
困りごとが変わると聞いて、自分に
何ができるか分からないけれど、
良き伴走者になりたい。

もっと早く
この障害のことを知っていたら、
違う対応ができていたかもしれません。
世の中全ての人に聞いて
欲しい内容です。

マンガを含む冊子の発行や動画の作成、YouTube でのシンポジウムのライブ配信など、地域福祉コーディネーターにとっても慣れないチャレンジが数多くありました。それでも諦めずに、多くのボランティアや団体、機関、企業など様々な立場の地域の方に相談をしてみたところ「一緒に考えよう！」という皆さんが集まり、プロジェクトのメンバーが増えていきました。

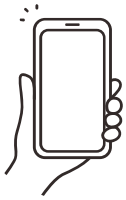
第2回シンポジウムの様子

■ 広がりは止まらない

地域福祉コーディネーターのもとには、現在も全国の自治体や社協から、そして同じ悩みを持つ親御さんからも「地域で冊子を紹介したい」「同じような取り組みをしたい」と問合せが入るようになりました。1本の電話から始まったプロジェクトが、たくさんの人をつなげながら、練馬を飛び出して全国から反響を得ています。

今回の取り組みによって、練馬区の子どもたちの学習環境は少しだけ変化してきています。関わったお子さんは今では成人しました。今後は就労の場面などより広い範囲で社会との関わりが必要です。第6次計画でも引き続き、発達障害の支援を行っている団体や関係機関等と連携しながら、更に理解者が増えるよう取り組みを広げていきます。

ダウンロードは
こちらから



PDF 版冊子

YouTube 動画

Point

このように、地域福祉コーディネーターは個別の困りごとも地域全体の課題と捉え、
住民のみなさんとともに解決につなげる取り組みを行っています。
身近にある困りごとについて、地域福祉コーディネーターと一緒に考えて行きましょう。